

「顔色がよくなってきたようですな。よかった」

女性の言葉につられて背筋を伸ばしてみる。神経の隅に倦怠感が残っているが、どうにか飼いならせるくらいにおさまっていた。この身を宿主として巣食っている死の概念。それが抑制を外れ、限界を超えたとき、自分も終わりを迎えるのだろう。

「悪かったね、面倒をかけてしまった」

「気にしないでください。困っている人を見ると、放っておけなくて」

「君の名前を聞いてもいいかな」

「バゼットといいます」

間髪入れずに返事がかえってくるのはこちらを警戒していない証だ。バゼットというのも本当の名だろう。覚えがあるはずもないのに、過去に触れた膨大な名前と付けあわせようとしてしまう。

「貴方は」

「ケリイ」

自分でも弱々しい声だと思う。バゼットが自分の名を正しく発音できないだろうという考えゆえだったが、言葉にしたとたん自分の歩んできた軌跡が脳裏に明滅しはじめ

た。夏の島、背に照りつける陽射しと、死に静まりかえった家。命と状況を天秤にかけ、摘み取ってきたこの名。さまざまな意味と犠牲の上に成り立ってきた名だ。

「日本の方ですか」

「判るのか」

「知っている人が日本人にひとりいますが、その人と訛りが似ています」

バゼットがはにかみ、綿菓子を所在なげに動かしている。頬に浮かんだ赤みを、バゼット自身は気づいていないだろう。

「恋人なのかい」

「違います。信頼はしていますが、そういう仲ではなくて……向こうがどう思っているのかもわからないですし」

そこでバゼットは寂しげに黙りこんだが、すぐもとどおりの笑顔をみせた。若く希望に満ちた、切嗣がついぞ忘れていた希望だ。

「でも、そうだったらいとも思います」

「そいつが羨ましいな。君みたいな素敵なお嬢さんにそう言われるなんて」

こちらの言い様をどう解釈したらいいのかわからなかつ